

人文組織工学 A 基礎理論

情報化について



情報の略歴

元々、「情報」の単語は森鷗外がドイツ語の翻訳で初めて一般に用いたとか。それ以前に軍関係の資料にも表れていたそうだ。明治維新以降に生まれた単語のようだ。

以降、軍隊で使われていたが、組織社会になり、企業が台頭し、技術を競うようになり情報が日常に使われるようになった。ここから、情報についての間違いが起こり始めた。

パソコンが普及し始め、1990年頃から情報の認識度が高くなった。ネット社会になって、情報社会が本格化する。

情報が仕事を変え、市場を変えるのは事実である。情報は意志決定のための刺激剤、条件要素である。知識は知識で、情報ではない。

コンピュータ、通信回線等々で情報機器と言われる物が増えた。コンピュータ上に乗ったモノが情報と言われていた。ここにも間違いがある。知識と情報が混在した。知識になるものが、立場によっては情報にもなる。代表例では天気予報が挙げられる。気象学者には知識データとなるが、他の者にとっては情報である。

コンピュータを操作する者、コンピュータプログラムを構築する者も情報取り扱い者として認識しているところもある。コンピュータ雑誌も情報誌と言われている。

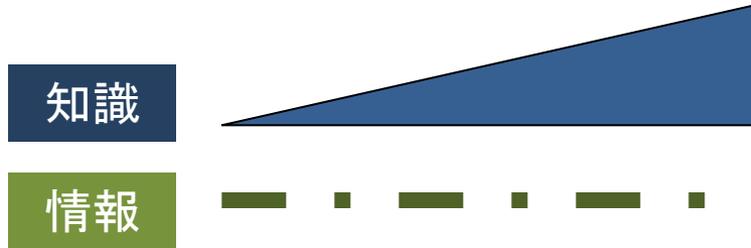
2000年を過ぎて、知識と情報の区分が不明瞭になった。

しかし、知識と情報は異なる。「このような知識がある」は情報であるが、その中ある知識は情報ではない。

情報概念

- 情報には静と動がある。一時的現象と変化状態の現象をさす。
- 受け取る側の目的によって、情報の性質が、前提情報、間接情報、直接情報に分類される。
- 情報は、情報自身が有効ではあるが、知りえるタイミングが重大な意味を持つ。
- 情報は、認識または知覚した時点で情報でなくなる。
- 情報は知らなければ情報にならない。情報を知った段階で、有効情報と不用情報に分かれる。
- 情報を受け取った者に、自らの目的がなければ情報にはならない。
- 情報があるとは言えず、情報があるかもしれないが膨大にある。
- 社会的数値情報は数値になった時点で手遅れである。情報価値はない。確認である。
- 情報は数値と文字の2つがある。
- 対象者全員が知って有効になる情報と、一部の人が知りえて有効になる情報がある。
- シミュレーションは、自然科学で事実になる可能性があり、社会科学では単なる予測である。

情報と知識



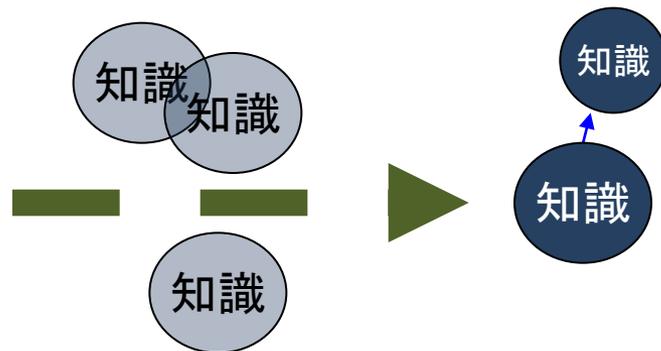
元々、情報と知識は異なり、同一にとらえられない。左図に示すように、知識は積上げられ、継続する。情報は一時的で断続であり内容が変わる。知識は必要であるが、情報は必要であるとは限らない。

目的を持たない行動に情報は不用である。



知識の範囲、知識の深さが情報探査の範囲を広げる。情報の知覚に影響する。

目的を達成する要件は、自らの知識と行動可能範囲によって定められる。同時に情報知覚範囲を決定する。



知識は情報によって、融合したり、分離したり、知識の範囲と有効性を変える。

知識が情報によって変質しないが、知識の向きが変化する。

情報は情報で、知識は知識

知識体系要件or
検証条件or
目的達成補完知識



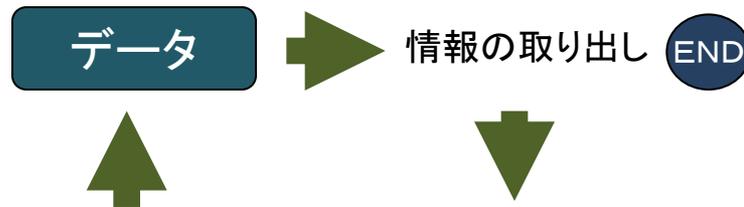
データと言われているものには3つの性質がある。

・データは情報そのものである。

・データは、元々知識だった。

・1つのデータが立場によって、情報にも知識にもなる。

①～③はそれぞれが絡み合って、知識の創造、検証、合成が行われる。



個人によって必要とされる情報が違う。情報は目的または目的に類するものがあって情報となる。

情報発信者は、相手にとって情報であると言える場合は相手が必要としているものを知ってときのみである。

情報に携わる者の責務

- 情報に携わる者は、情報の意味を正確かつ適正に理解しておかなければならない。情報を受け取る者にとって迷惑である。
- 情報であるとの判断は受け取る側の問題で、情報を発信する側の問題ではない。余分な情報の発信は時間泥棒になる。
- 情報を発信するとき、相手に対して必要な情報は何かを聞かなければならない。
- 情報に携わる者は、「情報を受け取る者は、自身にとって必要な情報は何かを自らに問わなければならない。問うことが仕事への責任の一つである。」と説明できなければならない。

◆現在、適正な情報処理業は少ない。ほとんどいない。コンピュータ・プログラミング、システム設計者は情報処理業ではない。コンピュータ関連のエンジニアである。

◆データ分析は、情報分析ではない。仮にデータが市場データであったとしよう。これを分析する行為は市場観察であって、情報ではない。分析データを使い、意志決定、行動決定に影響する内容が情報となり、情報と判断する者は、決定をする者である。この分析を行っている者はかろうじて情報処理者と言えるかもしれない。しかし、求める結果（自らに都合の良い結果）を得られない場合はない。自らに都合の良い結果は必ず見つけられる。問題は、その結果に相反・相関する結果がどれ程あるかである。

情報と知識の区分別

- 天気予報は多くの人にとって情報である。気象学者にとっては知識体系のためのデータである。マーケットに関わる現象は情報である。社会学者、経済学者にとってはデータである。これらに類するものも同じである。
- 歴史年表は知識である。社会史のデータである。多くの人にとって、現在の社会変化をとらえる知識データである。
- 地図は知識である。旅行ルート、立地条件などで活用するが、活用したものは知識として組み立てられている。「地図が変わった」は情報であるが、地図は知識である。
- 料理のレシピは知識である。レシピは繰り返され、伝達され、改良される。これに類するものは知識である。
- 鉄道の時刻表は情報でも知識でもない。制約である。「時刻を知る」は、知ったときの情報である。
- 「新しい何々の分野の知識ができた」「新しい商品が売り出される」、これらは情報である。「新しい知識」の知識は知識である。「新しい商品」の商品は知識であり、技術である。
- 新聞記事には純然たる情報と、純然たる知識と、人の立場によって情報になるものと知識になるものがある。
- 組織で、隣の部署の役割を知るは、情報を得たのではない。組織図を知ったのであって、仕事を行う時の決まりである。隣の部署の役割を情報としてとらえるのは、仕事の怠慢である。
- 隣の部署に今まで違う人が異動してきた。自部署でも良い。その人の仕事のやり方を知るは情報である。一度、知れば終わる。その人との付き合いが続くのであれば、知りえたことは自らが仕事をする上での制約であって、知識でも情報でもない。

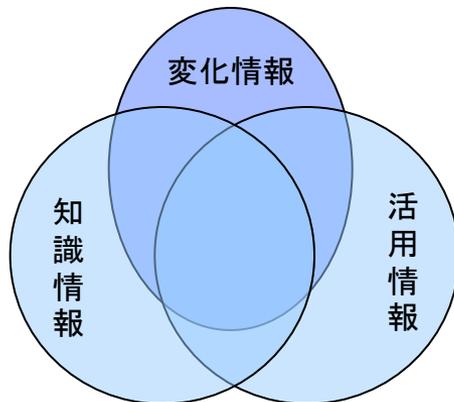
マネジメントでの情報

マネジメントに必要な情報は大きく分類して活用情報と知識情報、変化情報の3つがある。大切なのは組織内情報ではなく、組織の外での情報である。

●知識情報は、知識が互いに関連している状況、関連を持った知識、新しく生まれた知識、アプローチ、方法、構造などが挙げられる。特に関連分野だけでなく、知識と言われる全体を現した関連性は重要である。

●活用情報は、知識、商品、技術がどの分野で、どのような使われ方をしているかの情報である。関係する分野、関連外分野を関わりなく観察する。新しく使われた分野、新分野の登場は注視する必要がある。

◆変化を作るために常に観察が必要である。



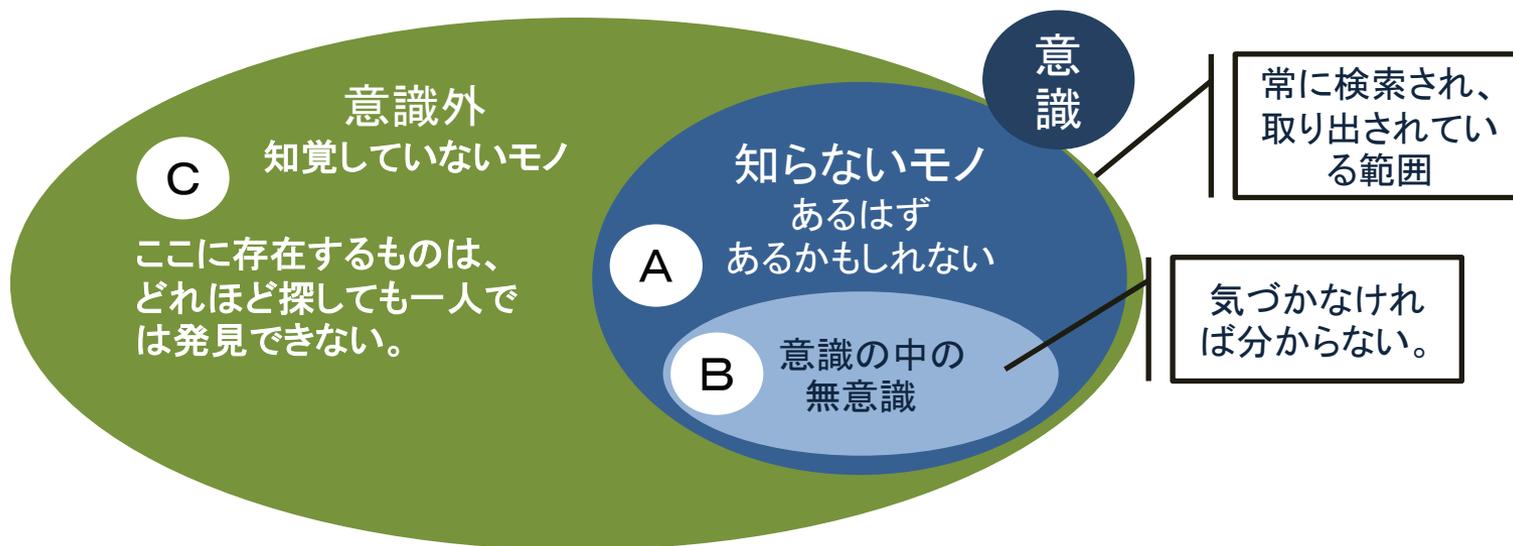
●変化情報は、主に市場、市場外、社会、文化などの変化、動態変化(人口、世代交代、公共機関、インフラ、企業動態など)の変化は見逃せない。

社会関連変化と、知識情報、活用情報が、自らの分野や使命が重なると、自らの市場に大きな変化が起こると予想される。

情報提供の基本姿勢

情報分析での情報提供は、絞り込みではない。時間での無限、データ両の無数の範囲からの抽出である。

＝興味の絞り込みをしてはならない。相関・相反、部分に対する全体からの抽出である。＝



情報を取りだす者は、日常、Aの範囲で行っている。B、Cから情報を取り出そうとしている人は少ない。

情報を提供しようとする者は、BとCの範囲からも選び出せることを考えねばならない。それは、求める者の未来への可能性の示唆である。

Aはデータ限度があるが、BとCには無限である。

